琉球大学学術リポジトリ

造形について：特に幼児期からの造形活動のあり方

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 西村, 貞雄, Nishimura, Sadao
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/943

造形について

——特に幼児期からの造形活動のあり方——

西村貞雄

MOLDING

——How to teach molding especially in infanay——

Sadao NISHIMURA*

(Received July 31, 1987)

The word "molding" is often used when we talk of art. But "molding" in general sense is much different from that in education. Even educators (teachers) have different ideas of molding. So it not a little gives influence in the education of plastic art.

The following is my opinion of what molding really is. and how growing children should be taught molding from infancy.

「造形」という言葉はよく使われているが，一般的な使われ方と，教育の中での使われ方では，内容に大きな違いがある。又，教育者の間でも，理解に幅があり，美術教育に少なからぬ影響を与えている。

本稿では，「造形」の言葉の意味するところと，幼児期からの発達に添った造形活動のあり方について述べたい。

I　はじめに

「造形」と言う言葉が日常よく使われる。自然の造形美，花の造形等，身近な物を見て造形的であるという表現を頻繁に使う。ところが保育所（園），幼稚園の先生達の間でも，造形はよく取り入れているが，絵の指導はあまりやっていない。という区別された使い方をしている。このようなことが数多く出てきたので，講義の中で学生にこのことに付いてここ数年間質問をしてきたが，ほとんどが造形とは立体を作ることであるという認識であった。これは先の保育所や幼稚園の先生方の考えと全く同じで，発泡スチロールや段ボール，牛乳パック，プラスチックの容器，粘土，紙工作等による製作のことをさして，造形といっていることがわかったのである。

保育所における保育内容の区分に「造形」という領域があり，幼稚園では「絵画製作」，小学校では「図画工作」，中学校，高等学校になると「美術」と名称の違いがある。国語や算数，理科，社会，音楽，体育等他の教科では，名称がそれ程変わるということもなく，一貫性があるように感じとれるが，美術では，いろいろな名称が使われており，その教科のイメージも多様化し複雑化している。造形教育といったり，美術教育といったり，人それぞれに何気なく使っている一方で，造形教師とはいわずに，美術教師という呼び名が定着している。

「造形」に対する一般（父兄）の理解と，教師の理解度にも格差がみられる。特に幼児期からの「造形」の分野に対する理解度により，重要性の認識が左右され，偏った内容の教育がなされてしまうように思われる。造形の分野に対する幼児期からの教育が正しく行われれば，美の概念も固定化せず，柔軟性をたもち感受性が豊かになる。こうしたことによって「造形」に対する特別視が緩和され，ひいては現代美術への理解にもつながるの

*College of Education University of the Ryukyus

ではないか。その様な観点から，保育所保育指針にある「造形」を取り上げ，発達段階に於ける造形活動のあり方について述べたい。

II　造形の教育現状

教育の中で，造形とか造形活動とかいう言葉がよく用いられるようになった。保育所，幼稚園でも造形教育の重要性がかなり理解され，取り組まれる傾向にある。しかし，園によっての格差があり，また教師の理解度にも，まだまだ多くの課題を抱えているようである。また父兄の造形教育に対する関心もうすく，「情操教育は大切だ」と言うことは知っていても，造形との関わりかたには具体的に関心をもたず，特殊な才能として片付け，将来に向けての生活の中のアクセサリー的な存在ぐらいにしか，理解されていないようである。

「国語や算数は父兄によって支えられ発展し，図工は子供によって支えられている教科である」といわれる[1]。以前中学校時代の恩師にひさしぶりにあった。その先生には優秀な息子さんが二人いるが，「美術」以外は全部5であるといわれた。美術はあってもなくてもよいというのが恩師の考えである。父兄を含め美術に直接関わっていない人々は，それ程にも関心がないというのが実情である。このことは過去の美術教育のあり方とも関係し，一般にかなり偏見があるようである。

筆者は以前短期大学の保育科に在職し，幼児期の造形教育にたずさわってきた。保育者ととなるための造形能力や感覚を高めるための図画工作と，保育内容における絵画製作とを担当したのであるが（現在も絵画製作を担当している），学生の大半が美術に対する苦手意識が強く，学生の話を総合すると，小・中学校時代の授業の取組方に問題があるように思われた。以来機会あるごとに学生や保育現場の先生達にアンケートをとってきた。その結果は，全体の80～90%に苦手意識があるという極端な結果が現わた。これは沖縄だけの現象かと考えていたが，そうではないようである。日本教育大学協会全国美術教育部門大学美術教育学会や，他の美術教育の団体等に参加した際にも出席者間の話し合いから伺うことができ，かなり著しいものがあるように思えた。また出版物などにもこの問題について触れているものもあり，例えば「苦手の人のための絵画製作入門」[2]で「もし，あなたが絵画製作が苦手であっても御安心下さい，そんなに珍しいことでもありません。むしろ苦手でない女性のほうが珍しいのです。」とあり，ある保母学校での新入生からアンケートをとったことについて述べている。「絵を描いたり，ものを作ったりすることが好きですか」この質問に対して「嫌い」「嫌いではないが自信がない」と答えた人がなんと90%もおり，10人中9人までが興味はあるが自信がないということであった。得意であるということのほうが珍しいようである。このことは筆者が14・5年来調べてきたことと全く同じことであるし，又「絵を見るのは好きだけれど，描くことは嫌い」と答えている。近年高等学校では芸術として音楽，書道，美術（工芸）からいずれか一科目を習得することとしているところがほとんどであり，美術を履修するものは圧倒的に少なく，音楽ないし書道を選択するものが大多数にのぼるという現象がある。

そのようなことを学生や保護者などにも聞いてみたところ，美術の授業では課題ごとに準備する道具が一定でなく，金もかかるし，与えられた課題も考えなくてはならないし，彩色などにも時間がかかり，無理があり楽ではないということが，大方の理由であった。

又，小学校の教師においても，4人中1人の割合で，「絵の見方がわからない」と答える先生方がいるという[3]画家で絵画教室を開いている知人もその文の中で，「ある日，ある小学校から美術の特別授業を頼まれて行った。時間前のひととき，先生方と雑談をしていたが，その時「実をいうと絵の時間は，ほとんど事務時間みたいなものですよ」とか，「私，絵のこととなるとどうにもなりません」とか，「お手上げですよまったく」とか言って笑いとばす始末であった[4]と述べている。この内容と類似したことは，筆者も直接聞いたことがある。夏季休業等を利用して，図工教育研究会・講習会が数多く開催されている。意識ある教師は参加し，苦手教科を克服しようと懸命に努力している。

「絵の見方がわからなければ，絵の指導は出来ない」ということが言われるが，発達段階における年齢による絵のあらわれかたや，絵の発達の特

性を知るということは，子供を知る上での重要な要素であるにもかかわらず，見方がわからないということは，苦手意識が波及しているからである。

Ⅲ　造形教育の変遷

1.　絵の教育

小学校の図画工作教育では，特に絵を描く活動が中軸となって，彫塑やデザイン・工芸・工作の領域を広げるとされている。その理由は絵を描く活動が様々な造形表現の基礎を形成するからであると，説明されている[6]。保育所や幼稚園の造形教育も同じ傾向にある。しかし苦手意識の強い学生や先生方が多い現状から察すると，取り組む割りには「絵を描く」ことの嫌いな子ども達を育てているように思われる。

絵の教育は一般に重要視されている割りには，あまり理解されていない。絵の指導もいろいろな取組方がなされているが，教師や学生，保護者のいずれもが，小中学生の頃からコンクールが主体となった絵画教育を受けてきているせいか，コンクールを目的に絵を描かされたという印象をもっている。人間形成や創造的な精神活動が絵の教育にあると主張されているが，現実には安易な取り組みが成されていて，理想にはほど遠いものとなっている。

絵の教育の意味は，狭くとれば，幼稚園の絵画製作，小学校の図画工作，中学校の美術，高校の美術科美術の中にある絵画の領域をさし，一般的にもこのように考えらせている。しかし絵の教育という場合，領域のなかの絵画のみをさすのではなく，美術教育全体を代表した意味にもとれる[6]。過去の美術教育の中で，絵描きが常に教師の大半をしめていたという事実が，このことに少なからず影響を与えていると思われる。またこのことから波及して，絵を描くことにのみ比重がかかり，他の領域の認識が浅いため，広範囲の造形活動が耕されていない点にもこの様な現象を生み出す素地があったと思われる。この様なことから推察すると，「美術」，「造形」の内容に対する理解の仕方に，かなりのずれがあるものと思われる。

2.　教科名について

小学校の「図画工作」科の名称を「造形」科に改めようという意見は，戦後40年の経過があるという[7]。また，幼稚園の活動領域名「絵画製作」も高度な印象を与えるということと，絵画の製作に偏る響きをもつことから，これも「造形」と改めようとする動きがある。「造形」「絵画製作」「図画工作」「美術」と一貫性のとれない名称は，だれでもが不思議な現象として受け取っているであろう。幼児期から児童期の美術教育を受け持つ教師の大部分が，その教科に苦手意識をもっている上に，名称までが複雑では，美術教育に一層の混乱を招くだけであり，一考をすべき時期にきているのではないか。

幼児期の6領域（健康，社会，言語，自然，音楽，造形），小学校の8教科（国語，算数，理科，社会，体育，家庭，音楽，図画工作）を，一人の教師が指導するということは，大変な業である。小学校で専科の教師がいるのは，ごく一部の学校である。幼児期の未分化な状態を，発達段階に応じてかんがえていくことは，大変なことである。小学校では低学年，中学年，高学年と幅広く発達していく道筋もきちんと把握しなければならない。これらのことを考えると，にっちもさっちもいかないのが，現在の美術教育の状況であろう。

3.　「造形」と「美術」について

用語は人によってその使い方，受取方に，大きな相違がある。感覚的な捉え方もあるし，時代の変遷による相違もある。辞書では，「美術」と「造形」は，

広辞苑[8]

美術　(1)　美を表現する技術，即ち芸術。
　　(2)　空間並びに視覚の美を表現する芸術，即ち造形芸術。絵画・彫刻・建築・工芸美術など。

造形　形をこしらえること。

学習国語辞典（金田一京助編）[9]

美術　美にたいする自分の考えで，絵・彫刻など目に見える物を作りだすこと。

造形　物の形をつくりあげること。

となっていて，どちらも「造形」は簡単にふれられているだけである。このことからも一般的な理解度がどの様なものかわかる。これらの言葉の

つかい方にこだわるのは，美術教育にたずさわる教師や，美術教育評論家などと呼ばれる一部の人達だけである。いずれの場合でもこれらの言葉の使われ方を検討してみると，あるときは「美術」と表現したり，また一方では「造形」と言ったりで，使われ方はまちまちである。幸い「教育美術」(1986年4月号)[10] の川村義之による『教科名の「造形」と「美術」について』という論文に接することができ，筆者自信の見解とかなり共通した見方であったので，これを引用することとする。

『「造形」も「美術」も比較的新しい用語で，明治の頃に出来たといわれる。竹内敏雄編美学辞典によると，「造形芸術」は，独語 bilden kunstk の訳で，かっては絵画，版画，彫刻のみを指した。とあり，狭義の「美術」と同じ意味に使うこともそれが誤りであるとはいえない。「美術」にしても，Fian Art が，初めは「技術」と訳されたり，「芸術」と訳されたりして，定義を明確にした上で使い出されたわけではない』とされている。また，「美術全集」や「美術史」においても，絵画・彫刻・建築・庭園・工芸・書などを包合しているし，最近の一部の絵画や彫刻・工芸を見ても，それぞれの領域が入り組んでいて判断に困る場合が多い[11]。デザインなのか，絵画なのか，ジャンルそのものが無意味になってますますその方向は不明になり，あらゆる造形は一つであると見るのが真相になってくる。『しかし「造形」には，個性的心情の表現を主とする，内的自立世界の造形と，機能制を場とし，化学原理に基づく外的効用世界の造形の二面があり，この両面が表裏のごとく一体となっている。しかるに，この両面をあたかも異質，対立的なものとしてとらえると，一方を強調する立場から「美術教育」といい，一方は「造形教育」を主張すると言う分裂が起こる。

「美術教育」には，教育の中で表現の内面をより重視したいという願いが強く，また「造形教育」には，客観的な造形形式や感覚，技術の獲得を重視したいというねらいが，潜在的に横たわっていると見ることができる。しかしこの両者は不離一体のものであり，本質的な相違がないならば，またそのような認識が広く共通のものになっていれば，教科名は美術でも造形でも差し支えないはずである』。としている。さらに川村善之はこれらの用語がどの様に受け取られているのかを調査した。調査は前後二回にわたってなされ，第一次には40項目，第二次には20項目の質問がなされた。

	項　　目	造形である　%	美術である　%	どちらでもある%
1	家電メーカーが新製品の色を決めること	23 %	27 %	5 %
2	幼児のなぐり書き	34 %	25 %	16 %
3	野菊の花を摘んで髪につけること	13 %	25 %	3 %
4	橋の設計のための力学上の計算	36 %	1 %	1 %
5	図法製図で正多角形をかく	38 %	11 %	1 %
6	プラモデルのおもちゃの組み立て	51 %	1 %	3 %
7	子どもがお母さんの顔を描く	21 %	58 %	15 %
8	名作絵画の鑑賞	1 %	85 %	
9	雪景色を見て感動すること	5 %	51 %	
10	子供が絵を描くこと	21 %	58 %	
11	自分の遊ぶおもちゃをつくること	80 %	5 %	

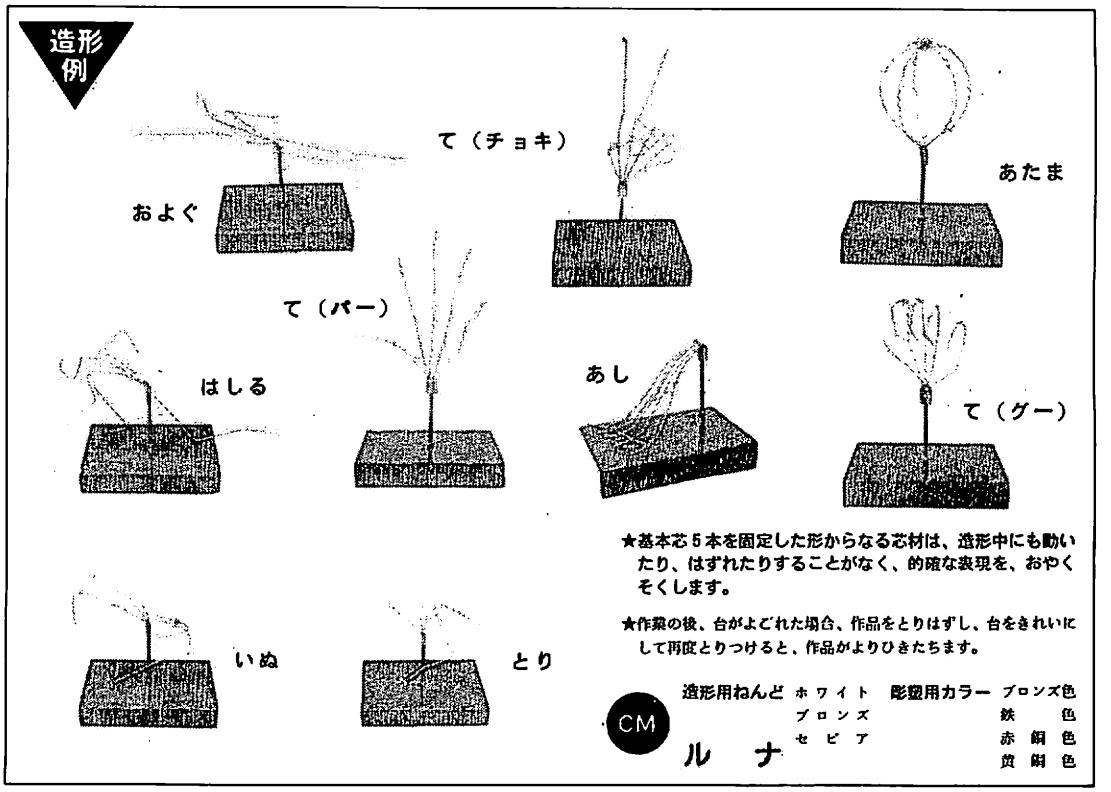
この表は，教育美術 1986年4月号に掲載された川村善之の論文をもとに筆者が作成したものである。

前頁の調査内容から判断すれば，空間に形作るものは造形とし，個性的心情の関わるものは美術とする傾向が顕著であると指摘している。

「子供が絵を描くこと」を，表（10）の比率のように美術とする考えと，「自分の遊ぶおもちゃをつくること」を表（11）のように造形とする結果では，冒頭にのべたような，造形に対する認識を立体的な構成とする考えと，相通じるものがあるように思われる。

「空間に形作ることは造形」としているのは，実空間における表現を指しているので，立体的なものという考えであろう。その様な結果から見ても，川村義之は教科名を美術とした場合，絵を描くことに偏る心配は確かにあるとし，「造形」とすれば個性的身上の表現は，弱くなるということが，予想されるとしている。

教材社の製品の説明にもこの様な一例がある。塑像用芯材の説明文のなかに『造形・それは確実な骨組み造りに始まり，として，芯材を人間の走る形や泳ぐ形，足，手（グー，チョキ，パー），頭部，犬，鳥等の形に作った例があり，さらに基本芯５本を固定した形からなる芯材は，造形中にも動いたり，はずれたりすることがなく，的確な表現をお約束します。』とあり，造形用粘土や，彫塑用カラーなどの宣伝ものっている。この説明や，素材の種類から判断しても，造形という意味が，かたよった内容，或いは狭義で使われていると考えられる。この様なことが重なって，教育現場の教師に，間違った考えが植え付けられているのではないか。「造形・それは確実な骨組み造りに始まる。」を例にとってみても，造形とは立体として作るものという印象はまぬがれず，造形例としての芯材も（いろいろな表現ができる芯材例として），また「芯材は造形中にも動いたり，はずれたりすることがなく」という文にしても，造形用粘土・彫塑用カラーと言う製品名からも，造形と言う言葉の本来の意味ー空間に色や形でもって，心の動きにともなって表現するーという概念からはずれ，造形とは立体として作られるものとの，偏見にとらわれていると思われる。



教材社の製品説明

この様に、一般的な「造形」のイメージとは、辞書にも簡単にふれられているように、「形をこしらえる」「物の形をつくりあげること」と単純で表面的な解釈で終始している。美術教育・造形教育の立場からは、内容の認識を深めていく必要があり、これからの教員養成のあり方も、検討すべきであろう。このままの状態でただ単に、学生に課題を与え、期限までに提出させ、評価するだけの、教員養成が行われ続けるのでは、学生は実技の面では課題数をこなすことにより、力をつけることは出来ても、その実技の内容に偏りがみられたり、学生が自分のやりやすい課題だけをするなどの、落とし穴に陥りやすい。この結果が子どもたちに与える影響は大きく、美術教育はその本来の意義から外れ、一般的に敬遠され、またその中で育った子ども達が将来教員になったとすると、よほどの意識の改革がその人の中でないかぎりこの授業形態を引継ぎ、悪循環となっていくのではと懸念する。

筆者の受け持つ科目の受講生のなかにも往々にして、偏った見方や、割り切った考え方をして、単位だけ取れば良いという態度が見受けられる。中学校教員養成課程の学生の中には、絵を描きたいためだけに、大学にきたとするものもいる。「美術教育」を専攻していても、造形全般から広い視野にたって美術を考えることをせず、先に述べたごとく、絵を主体とする立場に終始することが、ますます領域間の認識を狭めていく。

昭和54年（1979年）３月、奈良教育大学において、第一回大学美術教育科教育研究会が開かれた[12]国立教員養成大学間での、初めての美術教科教育だけの集まりであった。世話役の大勝恵一郎教授（鳥取大学）も、「他の学問の領域には古い歴史を積んだ学会があるし、美学、美術史の学会、美術やデザインの展覧会も豊かな歴史をもっているが、美術科教育の学会だけはなかった。」と述べられた。この研究会に参加された先生方は、美術教育に関する著書や発表でよく知られた実績のある方々ばかりであり、当日も外国の美術教育との関係や、発達論など実践研究を含めての、充実した発表討論であった。ある教授は、「我々が美術科教育を担当させられたときは、かなりショックを覚えたものだった。本来なら絵画の領域を担当したかったのに、美術科教育にまわされ、しかも当時はその方面の論著もなく、手探りの状態で今日までに漕ぎ着けてきた。最近はこの教科に大学院も設置され、研究も充実してきた。若手の活躍が期待でき、今後の美術教育に明るい兆しがみられる。」と、述べられた。このような発言からもうかがえるように、美術科教育の内容とその方向を確立させる素地は定着しつつあり、この方面の研究者も増えている。しかし、絵画、彫刻、デザイン、工芸の領域を受け持つ者には、美術科教育への理解があまり無いことも、話し合いの中でうかがえた。大勝教授は、「もともと芸術家肌の人は正直であり、組織創造には不精な人が多い。また展覧会で実績を上げれば済む、くらいに考えている方も、多いにちがいなく、その感覚が美術科教育を何時までも手軽な、学問としても添え物的なものにしてきた一因であったかもしれない。そういう意味でも教科教育としての美術を真剣に考える人にとっては、この場は長らく待れれた舞台であったろう。」と、述べている。

4. 図画工作の名称[13]

言葉の意味内容は、時代によって変化があり、その背景にある事情をしらないと、理解できにくい面もある。美術教育の歴史も、その時代の社会的背景と共に、教育一般の流れに沿った内容で、検討されてきている。小学校の「図画工作」と言う名称も、中学校の「美術」と同様に、今次世界大戦後の学制改革によって生まれたものである[14]。

「図」とか「画」とかいう文字が使用されていることは、歴史性を示す。南画、書画という印象からすれば、モノクロのトーンを感じさせ、「画」が画くということで単色の表現という感じがつよいのに対し、「絵」は多色のイメージを覚える。「図」においては、略図、製図等のように人に判りやすく表すという印象がある。「図」「画」は、明治の初めに使われ出したといわれる。教育に「図画」が使われたのも、技術的な面の重視からきているように思われる。

明治５年（1872年）学制が布かれた当時、小学校は上下にわかれ、上等小学校に「幾何学罫画大意」「画学」、下等中学に「画学」、上等中学に「罫画」の科目がおかれた。「幾何学罫画大意」

はその後「幾何学大意」と「罫画大意」にわかれ，「罫画大意」が図画教育の源流になったといわれている。また「画学」は「図画」と言う名称に変わって両者が一体となって「図画」と言う名称の下に今日に至っているといわれる。これらの内容からみると，当時は実利主義・技術主義・応用主義・臨画主義の立場で図画教育に取り組んでいたようである。

戦時中は「芸能科図画」「芸能科工作」と呼ばれた時代もあって，この二つの名称を略して，一口に「図工」と言ってきたともある。しかし今日使われている「図画工作」の略「図工」とは，内容的にも名称の由来からも異なっていると指摘されている。そしてこれ以後もっぱら「図画」「手工」の教科の略称として「図工」といったとされている。今日同じ名称で使われている「図工」は指導されている内容とは違った角度から出発している。このことは図画教育の内容を示した文部省の内部では，当時新旧の美術思潮が交錯し，日本画・西洋画の主権争いが，そのまま図画教育の在り方に結び付いたとされている。日本画の精神的高揚の主張に，欧米に留学し西洋画を身に付けた美術家が，外国の美術の技術面を主張すると共に，欧米から日本に招かれたフェノロサ，フォンタネージ，ラグーザ等の人の主張と入り交じって，大正時代に至るまで常に成人の芸術から見た図画教育が行われていた。

大正８年（1919年）文部省から視学官として欧米に派遣され視察をした山本鼎によって　図画教育の在り方が国際的視野から見た自由画教育運動として展開されるようになった。さらに翌年「造形基礎教育」という新説がうちだされ，自由画教育が絵を描くことのみに終始していたのを，絵画・彫刻・建築・家具・衣服・装飾・ポスター等の広い領域に立った造形の基礎としての図画教育で無ければならないとして出発した。

児童心理学の発展と民間美術教育団体の活発な研究活動にともなって，文部省も昭和26年（1951年）発表した小学校学習指導要領の改定案を昭和33年（1958年）に作り，その中で初めて「造形」の言葉が公式に使われるようになった[16]。

この様に古い名称に固執するということは，そこに何等かの意味があると思わざるを得ない。例えば「絵画」の言葉が一般に使用されているのに対し，「図工」は小学校以外ではあまり聞かず，独特な雰囲気をもっている。「工作」にしても同じことがいえ，「製作」にした場合は，段ボールや粘土，発泡スチロール，竹，木等，素材に関係なく使えるように考えられる。しかし「工作」となると，木工的な印象が強く範囲が限定された感じを与えられるのは，筆者だけではあるまい。いずれにせよ，教科の名称に左右されること無く，美術教育という観点からこの時期の子どもたちの造形的活動を通して，美的情操や造形的表現能力をいかに養えるかということが大切である。

5.　「絵画製作」「造形」[16]

戦後・昭和22年度（1947年）の「幼稚園保育要領」文部省試案の中で，保育内容に「楽しい幼児の経験」として，見学，リズム，休息，自由遊び，音楽，お話，絵画，製作，自然観察，ごっこ遊び，劇遊び，人形芝居，健康保育，年中行事の12項として出てくる。現行の「幼稚園教育要領」は，昭和32年（1957年）「学校教育法」によって幼稚園の目的と目標に従い文部省によって定められている。内容は，健康，社会，自然，言語，音楽リズム，絵画製作の６領域である。上記のように昭和22年（1947年）の幼稚園保育領領では「絵画」「製作」，昭和39年（1964年）の幼稚園教育要領では「絵画製作」と言う名称を使っている。

昭和22年（1947年）児童福祉法の児童福祉施設の一として，それまで託児所等の名称で呼ばれていた施設を保育所という法的な名称とした。昭和40年（1965年）９月に厚生省によって告示された「保育所保育指針」に，保育内容の一として「造形」の名称が使われているが，それ以前は幼稚園に習って「絵画製作」と言う名称を使っていた。この名称の変化は，戦後「造形」「造形教育」と言う言葉が多く使われるようになり，とくにデザインのような美的活動と技術活動との双方にわたる機能的な美しさを求める分野が，高度成長期と相俟っていちじるしく発展したことも一因となっていると思われる。

Ⅳ　保育内容区分の「造形」[17][18]

子どもの遊びは目的に即した行動の中で総合的

に行われているので，保育内容の区分の一領域だけで子どもを見ることは，適切なこととはいえない。子ども達は絵を描きながらも，描いた絵の内容を保育者や友達に伝えるためにもおしゃべりをする。造形活動の中にも，言語活動や社会活動の統合された営みがある。

保育内容の年齢区分と領域は，下記の表のようになっている。

年齢区分	領　　域
1歳3か月未満	生活・遊び
1歳3か月から2歳まで	
2　歳	健康・社会・遊び
3　歳	健康・社会・言語・遊び
4　歳	健康・社会・言語・自然・音楽・造形
5　歳	
6　歳	

2歳までの乳幼児は，生命の保持に直接関係のある活動としての「生活」と，それ自身を目的とした活動としての「遊び」との，二つの領域にしてある。

2歳児[19]は頭の中で物を思いうかべることができるし，まね（模倣）と言う学習能力がそだち，身体機能の発達にともなって行動範囲も拡がってくるため，健康・社会・遊びの3領域が設定され，3歳児頃から言葉を多く覚えるようになるため，言語の領域を分化させている。満4歳以上は幼稚園該当年齢児であり，幼稚園教育要領の6領域におおむね合致するようにされている。これは昭和38年（1963年）10月28日文部省初等中等教育局長と厚生省児童局長とが連盟で出した「幼稚園と保育園の関係について」という通達の中に述べられており，「保育所の持つ機能のうち，教育に関するものは，幼稚園教育要領に準ずることが望ましいこと。このことは，保育所に収容する幼児のうち幼稚園該当年齢の幼児のみを対象とすること[20]」となっている。教育に関するものは幼稚園該当年齢の幼児のみを対象にするとあるのは，保育園には3歳未満の乳児や幼児がいるということだけではなく，生活そのものに対する手助けに関した保育内容を取っており，入所も随時であり，一日の保育時間も長い等，幼稚園とは異なるからである。4歳から活動内容の領域「造形」があるということは，幼稚園教育要領の領域「絵画製作」に準じているが，この年齢ごろからは今までの経験にもよるが，ものを作る喜びや描く喜びを獲得する時期となり，表したものに命名もし，活発な造形活動をする。絵では「見た通りに描かないで知っている通りに描く」という段階にあり，表現活動の意欲が目覚ましい時期でもある。波多野勤子著「幼児の心理」[21]によると『4歳5歳になると，他人には目にみえている手や足があるほかに，見えないけれども「心」というものがある。ということがわかってくるという。このことについてオバケを例にあげ，キツネが化けて人間になっているとすると，あらわれているところは人間のかっこうをしているが，ほんとうはキツネであって，あらわれているものと，見えないものとはちがっているのである。4歳になると，こう言う区別に気が付きはじめてくるし，自分よりほかのものにも「心」があると思うから，机でも，雲でも，家でもすべて「心」をもっていると思っている（アニミズム）。』と，特徴を述べている。このようにこの時期の子どもは非常に空想的になってきており，しかも頭と手と目による協応作用が高まってきているので，造形活動を営む素地は十分そなわっているわけである。そのようなことを考慮して，領域としての考えから「絵画製作」に準じたのであろう。しかし「保育所保育指針」では「絵画製作」とはせずに「造形」としたことは，「この年齢段階の幼児の活動は，平面的な描画活動と立体的な製作活動とが，それぞれ独自な性格をもちながら，常に，心理構造的には一体となって形あるものを作り出す活動となっているという実態をもととし，その一体的な活動の特性を表わす用語として「造形」を用いたのである。」と幼児の教育用語辞典[22]で述べられている。

図画や工作，絵画，製作等の響きは，幅が狭く，一つの作品づくりだけの印象をまぬがれず，どうしても偏る感じを与える。この時期の子どもを指導する保育者であれば，前に述べたように苦手意識から発して過去の美術教育の授業形態からくる形式的な印象から入って，図画や工作等の語感に

左右され，作らす描かすの極端な取り組みにはしることは，心しなければならないことと思われる。その意味でも「造形」の用語は繋がりをもっている名称として，ふさわしいものといえる。

保育所保育指針では，幼児の発達段階を年齢的にとらえて，系統的に示してあり，保育活動においても具体的にとらえて明示されているので，指導に当る保母としては指導しやすくなっている。上記の表の年齢区分と領域から判断したのか，「造形」は4歳からの活動と判断する保育者がおり，また，描がかすこと，作らせることを，難しく考えすぎる者もいて，発達段階からくる系統性や継続性のある保育計画を立てるものは少ないように思われる。保育所保育指針は，幼稚園教育要領のように法的な強制力をもっていないとされているが，そのせいなのか，保育者の苦手意識のせいなのか，十分活用されていないようである。

1. 造形とは

幼児の教育用語事典（平井信義・編）に，造形について「一般には物質的素材を使って事物を有形的に表現し視覚に訴える美術，つまり，絵画・彫刻・建築・デザインなどの総称である。」と解説されている。これを含め他の辞典等の解説も美術教育を苦手としているものにとっては，かなり高度な印象を与えられ，抽象的に見えるようである。

筆者の中学校1年のときの美術の教科書「近代造形[23]」に「造形とは，空間に人間がこしらえる様々な秩序のあらわれをいう。絵や彫刻や建築ばかりでなく，日用の道具や汽車や自動車のようなものでも，すべて造形のあらわれである。人間が作り出した形でも，ただ偶然に乱雑にすててあるちりの山まのようなものは，造形とはよばない。あやまって紙の上にインクをこぼしてできたあとは造形とは言わないが，たまたまわれわれがその形に美しさを認めてそれを利用するならば，それも一種の造形である。また，野に咲いているままの花のような自然のものは，もちろん造形品ではないが，それを切り取って一定の形に整え，びんにさした場合は，これもやはり造形の一種といえる。われわれの生活は，すべてそういう造形によって囲まれている。くもは秩序ある形の巣を作る。しかしこれは本能だけによって作っている形であって，そこに美しさを感じ，それを生活のあらゆる面に生かそうとする態度は，人間が他の動物と異なる重要な特色である。

図画工作の勉強では，広く造形のあらわれに目を向け，その美しさを感じること，自分の力でそれを作り出すこと，その効果によって，われわれの生活，社会の生活を豊かに高めることを学ぼう」と述べられている。この内容は実に具体的であり，子どもの発達段階と照らし合わせていけば，より一層内容の理解が進むとともに，広い意味での造形や現代の美術などにもその理解が波及していくのではないだろうか。さて，空間に人間がこしらえるさまざまな秩序とあるが，空間には実空間と虚の空間があり，立体的なもので表現するのと，平面的なものの中に表現するのでは，その表れ方においておのずから子どもの思考していく過程や，感覚過程（感覚・知覚・表象）に，発達の度合いをよみとることができる。

実空間では，子どもたちが木の葉を並べたり，棒きれなどで線をひいて遊んだりする。これらは子どもたちの心の働きが伴う活動であるので，広い意味での造形である。紙面での空間は虚の空間であり，そこに形や色で空間を作り上げるのも造形である。

造形活動は，人の気持ちや考えが何らかの物質と関わり，活かすことによって具体的に目に見える，または触れられるものとして秩序あるものとする活動である。幼児においては遊びの中などで，心の働きがあって素材を利用するものの中に，造形がある。幼児の造形活動は，年齢が低ければ低いほど保育者の子どもを見る目，保育に対する考え方にかかっており，その影響は非常に大きなものがあるといえよう[24]。

「美しさを認める」「美しさを感じる」

「美しい」と感じたり，認めたりするということは，乳幼児期から「もの」に触れたり，「もの」にいどんだり，働きかけて遊ぶ中で，外界に充満している，未知の世界に向かっていく探求心によって育つものと，母親始め周囲の人達によって，気づかせたり語りかけたりしていく過程の中で，「美しい」を認知し，感動や感情が育っていくと

考えられる。ある幼稚園で造形教育について話し合いをし，その中で，きれい，美しいということについて触れたとき，上記の内容を通して具体例をあげた。筆者のアトリエで31歳になる男性と3カ月間一緒に仕事をした。その時期は庭に群生しているタンポポの花が満開で，咲き終わった花は種子になっていた。夕日に照らされたタンポポの花と白く柔らかな丸い種子の穂は，射す光に輝きを増し，あまりの美しさについ彼に声をかけた。しかし彼は無表情で何の反応もしない。再度「きれいだね」と言ったが，彼は「さあ」と言うだけである。せっかくのその情景，美しさを分かち合いたいと言う気持ちを，一瞬にしてなくした。そのような情景に，居合わせた人同士共通した意識が働いたことは，過去に何度もあったが，このような反応は，始めてであった。この様なことを話した上で，美術教師は教師自信が美しいと感じていることを，子ども達も同じように感じていると，無意識のうちに思っているのではないか，その結果，形のこと，色のこと等，つい口出しして教え込むのではないか。「感じる心」を育てるということが，どんなに大切かということを，指摘したのである。「美しいと感じるのは，物に美しさがあるのではなく，美しいと感じる私たちの心の中にある[26]。」ということにふれた。美しさを感じる心は，幼児期に育てなければ手遅れになる，といわれている。三島二郎氏[28]によると，精神発達の四側面と，その成熟の時期，発達の適時性は関連している。①運動面の成熟が20歳ぐらい　②知的な面が16歳から18歳くらい　③情動面が8歳から9歳くらい　④社会面が24歳くらいで成熟するといわれている。その中で，情動面の成熟が8歳から9歳で一番早く，その発達の適時を逃したら，後からでは取り返しがつかないということである。筆者がそれらのことにふれた後で，校長先生（沖縄県では，公立の小学校には幼稚園が併設され，校長が園長を兼ねる。）が，先にあげた31歳の男性の話についてふれ，私自身にもそれに似たことがあると話された。今校庭では菊の花の鉢植えが満開であるが，自分はそんなに美しいとは思わない。只あるなあと思うぐらいだとおっしゃるのである。自分は農家に育ったので，子どもの頃から親の手伝いをして，野菜作りをだいぶした。ホウレンソウの葉やネギの葉の生き生きとした緑を見ると，何ともいえぬ感動を覚える。と，強調され，先の男性の気持ちがわかるということであった。また，知人の教師にこの話をしたら，彼の身近にいる水道工事関係の仕事をしている50歳代の職人についてふれた。あるとき事故で長期の入院生活をしたそうである。殺風景な病室にいつも花が飾られていたようであるが，本人はほとんど気が付かなかったそうである。花が美しいということも，以前から感じなかったらしい。ところが，病室で退屈しながら知らず知らずに花を見ているうちに，ある日突然きれいに見えたそうである。以上のような例は，さがせば身近に幾らでもあるようで，育つ環境の重要性が認識される。美意識をもった人による手立て，気付かせ方，子どもの全面発達を考えての教育がなされなければ，後々の影響は大きく，調和のとれた指導計画が必要である。

その様な観点から，保育指針にある内容を理解し，自信のものとすることによって，「造形」をより広いものと認識し，柔軟な感受性を育て，偏った美意識を持たないようにする。このことが，子どもの絵の発達段階にそって，子どもの絵を正しく見ることにつながり，子どもの絵が正しく指導できるようになるのではないか[27]。また，このことにより，保育所から幼稚園，小学校へとスムーズにつながっていく過程がとれ，無理のない造形活動の指導ができることとなる。

2. 造形の内容

子どもの造形活動は，子どもの全般的な発達の中で営まれ，他の分野の発達と密接に関連しながら発達していくものである。下記の表は保育所保育指針から「造形」に関するものを抜粋したものである。年少児においては，「遊び」の領域に造形的なものや造形に関係するものを取り上げ，保育のねらいと照らし合わせて，造形について述べたい。

1歳3か月未満児の造形

保育のねらい	望ましいおもな活動「遊び」
(5) 身のまわりの音や，動くものを聞いたり見たりしてその楽しさを経験させる。 (6) おもちゃや生活用具を自由にいじらせ，外界に対する好奇心や興味を育てる。	(1) おもちゃをもったり打ち合わせたりして，遊ぶ。 (5) 身のまわりのいろいろなものに触れたりいじりまわしたりする。 (7) 水，砂，積み木などに興味を持つ。 (13) 身近な物をかいた絵を見る。

生理的成熟期といわれる0歳から1歳ごろは，にぎる・ひっぱる・つつく・やぶる……という手の働きの発生があり，造形活動の基礎能力形成期ともいえる。この時期生活経験は小さいが，周囲のものへの関心は日ごとに育っていく。この手の働きは，単に外界に働きかけるだけのつかんだり，ひっぱつたり，やぶったりという働きではあるが，だんだんイメージのいうことをきく手になっていき，なぐりがきなどにも発展していく。そしてイメージを表現しようとする手の働きそのものの中でイメージそのものも豊になり，同時に手の働き自体も豊かになっていく。また手の働きは，大脳の働きとも密接に関わっており，外界を認識して言葉を獲得していく上でも大きな役割を果たすといわれる[26]。このように身のまわりにあるいろいろなものに触れることによって，音や重さ，軽さ，形，色等を少しずつ認識していき，見ることが深まり興味や関心をいだくようになる。この時期の子どもの視るということは，触れたり，香りをかいだり，音を聞いたりして総合的に物事を通して視ることである。最初の「さわって視る」の経験を重ねていくことによって，対象物との関係を深め「見てさわる」に変化させていく過程である。

「表現活動の第一歩は耳をそばだてることから」といわれるくらい音の世界も大切である。おもちゃにはいろいろ音の出るものもあり，聴くことが視ることになる。さわる，動かすという流れによっておもちゃに興味，関心がそそがれていく。おもちゃには，形，色，重さ，動き，音と造形の要素が内包されているので，年齢にあったおもちゃを与えることが重要である。

「身近なものをかいた絵を見る」ということは，身近にある立体的なものと絵に描かれたものとの関係を通して，子供を取り巻いているいろいろなものを自分自信で観察することにより，考える力が育ち，美しいものを感じ，作りあげることにつながっていく。

1歳3か月から2歳児の造形

保育のねらい	望ましいおもな活動「遊び」
(5) 身の回りのいろいろなものに対する関心をたいせつにし，それを満たし，その発達をたすける。	(14) 身の回りにあるものを手でいじり回し，たたいたり，ころがしたり，ふりまわしたりする。 (16) 土，砂，石や水で遊ぶ。 (24) クレヨンや鉛筆でなぐりがきをする。 (25) 積み木や組み木などで，積んだり，くずしたりして遊ぶ。

美しい絵を見たり，音楽を聞いたり，童話を読んだりすることと，「もの」との対話を豊にすることによって，五感の活用ができる。感覚を通して「もの」に触れ，「もの」の形態・量感・質感等を体感させることは，「もの」との対話によって「もの」の質をわからせることである。そうした，体によって感じ取った，言葉になり得ない心の中の形を，積み重ねていく過程が，造形活動につながっていくことによって，表現活動は豊かになっていくものである。

環境にもよるが，普通1歳前後でなぐりがきを始める。紙やクレヨンなどを与えると，手の動きにともなって，いじくるような点打ちや，無秩序ななぐりがきに発展していく。この動作は「絵」というようなものではなく「汚す」行為である。手にした材料で何にでも線で描きまくる。やがて，手の動きに反復動作が加わり，手を動かすとその通りに描けることを発見し，次第に動作の調整ができるように感覚を養なっていく。しかしこの動作は紙やクレヨンを与えるとすぐできるというわけではない。その前に「もの」をたたいたり，つついたり……例えばスプーンをわしづかみにして，たたいたり，またテーブルの上に牛乳でもこぼれたら手でこすったりする動作が，紙や鉛筆につながっているのであり，ある日突然できるものではない。この時期の子どもは大人のやることをなんでもまねようとする。周囲のものへ関心をもち始めると，あらゆる方向を探求していくようになり，いろいろなものを吸収し，意欲的に何にでもぶつかっていくようになるので，活動要求を充足させることが大切である。このような，感覚的にいろいろなものを認識していく過程は，そのまま遊びとなって発展していく。土，砂，石，水等であそんでいるうちに，しらずしらずにそのものの質感を捉えやがて身近にある容器等を利用し，遊びを工夫したりするようになる。粘土を使った形の変化をともなう遊び，積み木，組み木等の構成遊び，紙等のなぐりがき等，様々な遊びを通して，素材の基礎的な使い方を覚え始める段階である。この年齢は，子どもたちのエネルギーや意欲を十分発散させることが重要であり，その中で，体の動作や手の活動をうながすような環境や，材料を用意し，触れる機会を与え，使い方，遊び方をおぼえていくように考慮することが大切である。

指導する側の意識の改革

造形活動というと，保育者には過去（自分自身）の美術教育の体験から一つの枠があり，幼児の造形活動を考えるとき，幅が狭くなり，妨げになる場合がある。例えば教材の選択に偏りがあったり，発想が固定化して，机の上でないと描画活動は出来ないとか，画用紙にクレヨンで描くものと決めてかかったりする。また，積み木，組み木等の遊びも，朝・登園時の自由時間にするものというような狭い範囲での遊びに対する考えに，支配されがちになる。

この年齢の造形活動は，普通にいわれている造形活動とはほど遠く，石ころを集めたり，木の葉を持ってきたり，新聞紙を破ったり，砂遊び，どろんこ遊び，園庭に線がきをして遊ぶ等，遊びが造形活動になる。破る，丸める，たたく，積む等は幼児期の基本動作であり，形の変化や，違う形・色・質……と共に，造形の基本となる要素である。この様なことを考慮した既成概念では無い造形は，保育者の弾力性のある工夫や，遊びの発見によって発展し，子どもの造形活動の幅を大きくするものである。

2歳児の造形

保育のねらい	望ましいおもな活動「遊び」
(5) 身のまわりの動きのあるものや，親しみのある小動物を見せたり，ふれさせたりして，それらに対する関心を育てる。 (7) いろいろな素材を用いて遊ばせ，表現することの楽しさを育てる。	(4) すべり台，ブランコ，砂場等で遊ぶ。 (9) 身のまわりにあるものや動植物に目をむけ，興味を持つ (19) 鉛筆やクレヨン等でなぐり書きをする (20) 身のまわりのものの数や色や形などの

	ちがいに気づく。 ㉑ いろいろな色を使うことに興味をもち始める。 ㉒ 粘土をちぎったり，こねたり，たたいたり，のばしたりして遊ぶ。 ㉔ 積み木や組み木でいろいろの構成をする。 ㉕ 何をしているところか独り言を言いながらかく。 ㉖ はさみやのりに興味をもって使う。

「情緒の発達は，快，不快の感情が早く分化して，だいたい2歳ごろまでに，種々の情緒が出てくる。」「5歳までには，おそれ，嫌悪，怒り，しっと，ふきげん，上きげん，喜びなどが分化して，大人のもつ基本的な情緒が出そろう。」「基本的な情緒の発達が十分育っていないと，美意識の望ましい発達はありえない。」と，言われている[29]。

2歳児は情緒の動揺が激しく，対人的には反抗期とも呼ばれ，すねたり，かんしゃくを起こしたり，自我の主張が強い頃である。汚す活動ーどろんこ遊びや砂，水遊び等，活発に体を使っての活動をすることによって，感情の発散をし，動作のコントロールができる。この時期は同じ年齢の子どもに対して関心があり一緒にいることを好むが協調して遊ぶことはできないとされる。この様なことから，2歳児の保育の領域には，「社会」も入っている。また，模倣がさかんになると同時に，いろいろなものに興味をもつようになり，このことが知的発達や表現活動の基礎となってくる。しかし興味は移りやすいと言われている。これらのことを考え合わせると，周囲の大人の関わり方や，てだての仕方が非常に大きい影響を与えると言える。特に造形に関しては，美意識というものが複雑な精神活動を伴うものなので，幼児の情緒の発達がたがやされているか否かは，母親を始め，保育者の美意識とも深いつながりがあり，大人の感情表現が直に子どもに影響を与える。

表現活動は子どもの生活感動の表現であり，その感動は子どもの好奇心や，生活経験によって起きるものである。そして興味や関心のあるところに，物の存在もある。そのような立場から考えると，この時期から身近にいる動植物に目を向けさせ，興味を持たせることが望ましい。小動物や植物の世話を保護者と一緒にし，関わりをもつことによって，生き物に対する愛情が芽生え，生命に対する尊さを感じ，可愛らしい，いじらしいという感じる心や，美しさに対する価値観も養える。㉒，㉖のように，粘土という可塑的な素材や，はさみやのりを使う細かい作業がとりいれられているということは，手の働きが分化し，右手と左手が異なった働きができるようになるからである[30]。

3歳児の造形

保育のねらい	望ましい活動「遊び」
(5)ごく身近な事象に親しみをもたせ，自然の中でじゅうぶん遊ぶことができるようにする。 (8)いろいろな材料を使って，もてあそんだり，好きなように作ったりできるようにする。	(1)ごっこ遊びの中で身近な生活の表現をする。 (3)身近な事物に関心を持ち，さわったり，集めたり，並べたりなどする。 (4)身近な自然事象をよくみて，親しみや愛情を持つ。

	(5)散歩などに出かけて目新しい事象に接することを楽しむ。 (15)紙などいろいろな材料を使って，はったり，折ったり，つなぎ合せたりしていろいろに操作して遊ぶ。 (16)作ってから名前をつけたり，何かを作ろうとしてとりかかる。 (17)作ったもので遊ぶ。 (18)いろいろなものの色，形，その組み合わせのおもしろさに気付く。

子ども達は日常生活の中で，手を動かすことによって，その動きにともない言葉が生まれてくる。その言葉に刺激されて，頭が働き，その命令が手に伝わって，動作が繰り返される。この繰り返しによって，子ども達の手の働きや言葉が発達し，頭の回転も活発になり，一つに止どまらずに，発展し続けていく。

3歳児は，ある程度の落ち着きと自制心をもつ。大人との約束をよく守り，手伝いをしたりすることを喜ぶが，時には泣きわめいたり強情になったりして，自分の要求を固執することもある。また，友達と物を分けあったり，順番を守って遊んだり協調的となり，特に気のあった友達と二人であればかなり長時間楽しく遊ぶことができるようであるが，3人以上になったり，気の合わない友達とは激しいけんかをすることもあるという。

この様に3歳児は社会性もかなり身に付いてきているし，この領域に「言語」が入ってきていることからもわかるように，言葉によって，大人や友達と，話したり聞いたりの出きるようになっている。これらのことは，知的発達にむすびつき，特に遊び，描画，その他の造形活動となって表れるようである。

描画においては，なぐりがき期（錯画期）から象徴期（意味づけ期）になる。偶然ある形に言葉で意味づけして，見たてる活動ができるようになる。みたてることができるということは，イメージができているということであり，棒ぎれを馬にみたてたり，刀にみたてたりして遊ぶことも，イメージで遊ぶということになる。話し言葉を獲得する時期でもあるので，友だちとも「ごっこ遊び」ができるようになる。

ごっこ遊び[31]

「子どもが，ことばや行動を通して周囲にあるいろいろな生活を模倣し，自分でないものになったつもりで行動することによって楽しむ遊び。」をいう。この遊びの中で，日常経験（直接経験・間接経験）している中からの再現を子どもなりにしていく。例えば，ままごと遊びでは日頃の母親のしぐさや行動をしたり，お店やさんごっこのなかで，お金や品物を紙にかいたり，粘土で作ったり，他の材料をそれに見立てて遊びに取り入れる。父や母，医者…になりきって演じるということは，子どもの情緒や知識，社会性等が養われていく一助となり，この遊びを通して，友達との関わりや，物との対話…自発性や行動力，生活圏の拡がり等が起こり，造形活動も活発になっていく。

この時期は心身の発達も極めて未分化な状態であり，描いたり作ったりする活動も発達の初期の段階にあるので，描いたり作ったりしたものは，大人がみたのでは何を表現してあるのかわからない部分が多い。ただ見るだけではなく，聞くことによって，意欲や興味を損なわないようにし，活発に活動を行わせることが，何よりも大切である。

何に見えるかな

「何に見えるかな」と偶然の形から連想させる活動を十分行わせることが，この時期の見立てる活動を一層豊かにし，イメージも多様に広がらせる。例えば，「物の形の部分からの連想」や「雲」「デカルコマニー」「破った紙の形（偶然なもの）」

「粘土の偶然のかたち」等に，何々見たい，似ている，と想像させたり，連想さたものをより確かなものにするために，フェルトペンやクレヨン等で補足させる。これらは，子どもの独創的な想像力によって，見ることの幅を広げ，表現の質を高めさせるきっかけとなる。

見る，気づかせる[32][33]

子どもたちは，身近な事物，自然事象等を，見ることによって認知していく。しかし興味や関心がなければ，見ることは深まらない。「目を使って心で見る。」とか「心ここにあらざれば，見れども見えず，聞けども聞こえず。」とか，昔からよく言われている。みてもボサッとしていれば，見ているようで，見ていない。子どもは自分の欲求や感情との結びつきで，感じ取りながら見ることが見えるのである。「見る」ということは，目の働きと，心の働きの双方による。「目によって見えたもの」について「何かを感じ」「何かを思った」時，それを「見た」ということになる。子どもたちは，「さわってみる」「くらべてみる」「さがしてみる」「たしかめてみる」「やってみる」等をしているうちに，年齢が高くなるにつれて「見る」ことが深くなっていく。経験をつませ意識させることによって，実感として見るようになる。造形活動では，特にこの「見る」ことの重要さを認識していくことが必要である。

3歳児の造形遊びを行うには，無計画にやっただけでは，雑多で散漫な時間をついやすだけになるので，計画を立て，系統的に，継続的に発展する学習にしなければならない。月齢によって個人差があるので，技能的なものは反復練習させ，習慣化させることも必要である。

4歳児の造形

造形活動自体は，1歳頃からなぐりがきのように行われていたが，準備段階として，0歳児をも含めて，3歳までは，遊びの中の造形としての領域となっていた。4歳から造形領域として，示されている。

保育のねらい	望ましいおもな活動「造形」
(10)いろいろな材料や用具を使ってものを作ったり，絵をかいたりする機会を与え，造形活動の楽しさをじゅうぶんに味わせる。	(1)いろいろな材料や用具を使ってかいたり作ったりする。 (2)自分の意図にそうように工夫して作る。 (3)形の組み合わせや色の選択について，感じ方が豊かになる。 (4)友達と一緒にかいたり作ったりする。 (5)見たり聞いたり想像したことを，かいたり作ったりする。 (6)かいたり作ったりしたものを使って，遊ぶ。 (7)自分や友達の作品を見せ合う。 (8)保母と一緒に身近な環境を美しくする。

4歳になると保育のねらいにも「作る」「描く」ことがあげられるぐらい，イメージによる表現の段階に入っていることがうかがえる。作る喜び，描く喜びは，イメージにそった手とことばを獲得した人間だけが味わうことの出来る喜びの一つであるといえる。この時期はただのびのびと遊ばせておけばよいというだけではなく，幼児のものの見方，考え方を正しく育てていく基礎的学習の指導体系が必要であり，この段階は，その糸口になる。

4歳児の発達の特徴は活動的，意欲的で，自分が選んだ目標に向かって自分の力を十分に現し，それを為しとげようとするといわれる。友だち間では競争心も起こり，けんかや組織的な遊びも展

開する能力をもっているし，想像力，好奇心も旺盛である。普通一般に子ども達は素直に驚いたり，疑問をいだいたり，めずらしがったりする。また，あることになりきってものごとに取り組むこともできる。その様な心の動きを，造形という表現の領域で十分に発散させ，その中で美的構成感覚や，色彩感覚を養い，心のコントロールをたもち，ストレスを解消することによって，潤いのある情緒の安定につながることとなる。

活動時間について

造形活動自体の重要さを知ってはいても，どのように取り組むかという問題がある。筆者が調べた範囲では，設定保育の中で，絵を描かかすというやり方が多く，1か月に1回とか，半月に1回というケースが主で，かなり形式的な指導形態であることがうかがえる。その考え方は，年間カリキュラムや月のカリキュラムに，固定化された位置付けである。前述したように，保育者自身の過去の美術教育からの発想により，小学校のように教科で分化された内容になっていて子どもの活動が見えなく，指導形態の扱い方も高次な考え方になっている。よく造形活動を取り入れている園では，週に2回とか3回というように，具体的に題材を配列した所もある。

子どもの描画時間を考えると，個人差は非常に大きく，画面の大きさや，描画材料によっても違いがある。幼児期の描画活動を見ると，1歳前後でなぐりがきをおぼえ，機会さえあれば，どこでもかこうとする。2歳3歳となるに連れて，描く勢いは増し意欲も高まる。しかし，大きくなるに連れて，興味の対象や遊びに拡がりが出てくるので，描く時間を決めて描かすことは段々と難しくなる。子どもには描きたがる時に描かせなければならないし，またそうすべきでもある。皆一斉に描かせるということは，この時期にはあまり感心しない。子どもが描画等についやす時間は年齢が高くなるにしたがって多く，長くなる。保育者は，常に子ども達が描きたい，作りたいと思うような環境や状況を作り，こどもの自発性を刺激して表現活動を高めていくことが，重要である[24]。

5歳児の造形

保育のねらい	望ましいおもな活動「造形」
(11)いろいろな方法で絵をかいたり，くふうしてものをつくったり飾ったりすることを通して，造形活動が豊になり，美しいものに興味や関心をもつようにする。	(1)いろいろな材料や用具の使い方が豊かになる。 (2)経験したり，想像したりしたことを，意図的にかいたり，作ったりする。 (3)形や色の組み合わせをくふうして，いろいろな表現をする。 (4)みんなといっしょに絵をかいたり，ものをつくったりする。 (5)かいたり，作ったりしたものを使って，遊びを発展させる。 (6)自分や友だちの作品について話し合う。 (7)身近にある美しいものに関心をもつ。 (8)かいたり作ったりしたもので，身近な環境を美しくする。

5歳児は全体的に均衡がとれ，友だちや大人と円滑に交流する。行動を起こすまえに考えるという計画性もあり，社会的な要求に応じて行動することもできるといわれる。基本的な習慣はほとんど自立できるようになり，批判力も発達してくる。造形活動でははじめに考えた目標をとげようとい

う意欲が強くなる。また，表現活動が複雑で多面的となり，自分や友達の表現したもののよさが感じとれるようになる。自分が作った作品を保母にみせて，その是認をうけることを喜ぶようになる。

運動機能の発達と関連し，今までの積み重ねにより，細かい手の動きができるようになる。たたく，ひっかく，こする，かく，ほる，なでる，おす，つぶす，まげる，のばす，ちぎる，つまむ，ならべる，まるめる，つく，くっつける，はじく，ひっぱる，ねじる，もむ，きる，からめる，おとす，たらす，つむ，こねる，とばす，なげる，やぶる等[25]の遊びの中での手の活動は，造形活動とも結び付いて材料をこなす助けとなり，表現活動をますます多面的で豊かなものとする。

4歳児は，長い短い，大きい小さい，昨日と明日というように2つの世界を1つにまとめ上げていくことができるが，5歳児では，昨日，今日，明日という時間の流れや因果関係がわかるようになり，3つの世界が確立されるようになる[26]。

描画においては，画面の下のほうに1本の横線—基底線が引かれ，その線の上に人や花，家等が並べられ，上には太陽や空が描かれ，画面上面ぎりぎりに雲などが描かれる。このように上下の関係や，ものとものとの関係がわかるようになり，製作においても，計画的に工夫する仕事をしようとする面が出てくる。製作活動は一般的に「描く」活動より遅れて育つといわれる。それはいろいろな素材を感覚的に身に付ける経験に，時間がかかる，と言うことと共に幼児の体力や筋肉の発達とも関係する。親指，人指し指，中指の3本指が自由自在に動かせるようにならなければ用具（ハサミ等）を使いこなす事も出来ず，この面でも，描画に遅れることとなる。しかし，多くの子どもは，描く活動よりも，むしろ作る活動の方に興味を持つし，遊びとの結び付きもあって活発に製作する。

この時期，描いたり，作ったりする活動が豊かになって来るので，やりっ放しにしておいて，造形力ののびる芽を育てないということは，保育者としての任に欠けることといえる。発達の特徴にもあるように，自分や他の人々を批判する力も育っているし作品を保育者にみせてその是認を受けることを喜びもするので，出来上がった作品を飾ったり，作ったものを試したりして，保育者が共感を示すことが大切である。特に，製作においては，発想，計画，材料の選択，製作という，過程や方法を検討する中で，子どもは満足し，次への仕事の欲求が生まれる。

6歳児の造形

保育のねらい	望ましいおもな活動「造形」
(1)造形活動に親しむ機会をあたえ美しいものに接する楽しさや創造的に表現する喜びを育てる。	(1)いろいろな材料や用具を適切に使う。 (2)感じたこと，考えたことなどをくふうしてかいたり，作ったり，飾ったり，する。 (3)いろいろな色や形を使って，いろいろな表現をする。 (4)みんなといっしょに，かいたり，作ったりすることのおもしろさがわかる。 (5)身近な生活に使う簡単な物や，ごっこ遊びや劇遊びに使うものを作る。 (6)自分や友達の作品などを，たいせつにする。 (7)身近にある美しいものを見て喜び，美しくしようとする気持ちをもつ。

6歳児は常に行動的で，自分がしようと思ったことは最後までやり通すし，他の人々のいうことを聞こうとしない。状況に応じて思考力を働かせ，仕事の手を抜く事もある。また，友達との間で，相互に統制がとれるようになり，集団を作って組織だった遊びをすることができるようになる。この様に，遊びの中で集中力，思考力がついたこの年齢は，かなり長い時間一定のことができるようになり，創造的活動がますます活発になる。子どもの表現活動は，心身の総合的全面発達の上にたって，はじめてその成果が上がる。この時期は言語活動も活発になり，自分の考えをためらうことなく発言し，行動力も高まって，友達との集団活動の楽しさも増し，道徳的心情の芽生えが育ち，知識欲も盛んである。描画活動では，意図的な線描の表現が巧みになり，色や形にもかなりの工夫がみられるようになる。製作においても同様で，予測して作ることができるようになる。

子どもの生活体験のなかで感動したことは，一つの「心象」となって，心の中に印象づけられていく。この「心象」をいろいろな材料で造形していく機会を豊かにあたえることが大切で，偏ったものにならないようにする必要がある。この時期の造形の基礎を成しているものは，視覚的なものばかりでなく，他の領域とも複合的にからみあった，生活の中でつかんだ経験の表象化である。空間の中での，平面的，立体的なこととのふれあいや，その表わし方を工夫することによって，豊かで多面的な思考が開発されることとなる。

この時期の描画では表現が豊富になり，表現形式もふえる。この表現形式も視覚的な物の色や形だけではなく，心の形象一心象で表されるものもある。基底線上に並列表現してみたり，展開表現，羅列画（カタログ画），レントゲン描法（透視描法），積み上げ式遠近法，強調の表現等は，見て描くのではなくて，見て知っているから，その知っていることを描くという，この時期独特の表現方法である。

V　おわりに

今の時代は，いろいろな意味で多様化している。人々の価値観によって受け入れられる面と，そうでない面の相違がある。本稿では「造形」ということについて論じてきたが，ここで現代芸術を取り上げ，その面から「造形」について述べてみたい。

「わからない彫刻」という題の文が，「形 for me」[37]に掲載されていた。現代芸術を受け取る一側面として参考になると思われるので，ここに抜粋引用する。

『琵琶湖で第1回琵琶湖現代彫刻展が，環境と造形の今日的意味を問う屋外彫刻展として開かれた。作品も従来の彫刻の観念からはみだしたものが見られた。ユニークな展覧会で，日頃，あまり現代美術，現代彫刻というものに縁のない一般県民が，運営にあたった。会期中，小学校5年生の一団がバスを連ねて鑑賞にきた時のことである。バスから下り立った中年の女教師は，「あれ，これは彫刻じゃないわ。だめよ。こんなもの生徒に見せたってわかりっこないわ。だめ，だめ。帰って，帰って。」と生徒をバスに押し返し，立ち去った。この一教師がとった行動は，現場における美術教育と現代美術の狭間を見る思いがした。彫刻に対する個人的な観念や美意識から判断し，とった行動ではあるが，子どもの美意識や感性をあまりにも形式的に摑まえているのではないだろうか。わからない原因が彫刻の側にあるのか，それともそれを見る側の彫刻に対する固定した観念や美意識にあるのか，教育の場にある者はこのことをはっきり見定めなければならないだろう。生きた鑑賞教育はそこから出発する。』と，あった。現代美術はわからないとする人々の象徴としてこの教師をあげている。現代彫刻という領域の受容態勢が出来ていなかったのか，考えさせられる内容である。

また，今年4月頃，東京都美術館でジョナサン・ボロフスキー回顧展があった。『幼少の頃の記憶，シンボリックなオブジェや独自のステイトメントからなる過去15年の集積が床に撒き散らされたメッセージとなり，天井をとぶフィギュアまで膨大に膨れ上がり，“All is one”の会場は絵画，彫刻，ドゥローイング，ボロフスキー自身による音楽，光，ムーブメントが一堂に会する大カーニヴァルとなっている』[38]との，この展覧会に寄せた文があった。筆者はこの展覧会を友人と一緒に見たのであるが，まさに自由気儘という感じであ

った。上野の森の東京都美術館入り口の樹木に人間の顔が描かれ切り抜かれた絵が，凧が引っ掛かっているように掛けてある状況から始まり，美術館の天井を打ち壊し，または壁にペンキで自由に描きまくっていたり，病的なくらい紙に同じ数字がびっしり書き込まれていたりして，面白さもあったが考えさせられた展示であった。同行した友人は，一瞬「この人何様か」とつぶやき，美術館は僕にもこの場を与えてくれないかと苦笑していた。

現代美術とは思考そのものであり，思考と感性の結晶である。いろいろな理屈があり，意外性のある作品もあれば，一過性の作品もある。美術史の流れや，現代美術の知識がなければ，理解出来ない面がある。

幼児期から小学校低学年までの表現活動の中にも，大人が理解できない面がある。3歳ごろの意味づけ期もそうであるし，5・6歳ごろの端的で直観的な世界もそうである。これらの表現の純粋性を，生かすも，殺すも，その場の指導者にかかっている。今まで述べてきた，広い意味での「造形」を自らのものにしている指導者のもとであるならば，子どもの表現活動は幅広く展開し充実したものとなる。この時期のこどもの造形活動は，遊びと切り離せないものとなっている。遊びの中に造形的要素が多く含まれていることを理解しようとせずに遊びは遊びとして片付け，造形とは別のものとして考えると，子どもの内にある自然発生的な造形的要素も遊びを造形化できなくなる。小学校低学年の図画工作に「造形的遊び」が新しく設けられたのも，このことを積極的に評価したことの現れであるといえる。この様に子どものもっている能力を最大限に伸ばすには，遊びは欠かせない要素であるといえる。現代美術の一つの特色はその根底において，子どもの絵と相通ずるものがあるといわれる。芸術家が子どもの絵を高く評価するのも，子どもの絵の純真な表現の中に現れる内容による。美的感覚は常に求めるものによって発見され，見直される。指導者が柔軟な造形理念をもつことによって，子どものもっている能力を，最大限に伸ばすことができる。

造形について

参考・引用文献

1）水野庄三著　「わかりやすい子どもの絵の教え方」三晃書店　昭和61年（1986年）6月15日　初版　p. 111

2）枝常ひろし・八木紘一郎共著　「苦手な人のための絵画製作入門」　全国社会福祉協議会　昭和53年（1978年）6月30日第3刷発行　p. 4

3）滝口泰正　「絵で一番だいじなことは」　美術教育を進める会　研究ノートNo.8　昭和48年（1973年）8月1日発行　p. 1

4）平良晃　「新生美術」－（私の美術教育論）　新生美術協会　昭和62年（1987年）5月25日発行　p. 30

5）鈴木五郎他著　「教科教育双書　図工科教育の理論と実察」　国土社　昭和58年（1983年）5月25日　p. 34

6）桑原実他著　「幼児絵画製作教育法」　東京書籍株式会社　昭和50年（1975年）3月1日第13版発行　p. 15

7）川村善之　「教育美術」第47巻第4号－教科名の「造形」と「美術」について－　財団法人教育美術振興会　昭和61年（1986年）4月1日　p. 56

8）新村出編　「広辞宛」　岩波書店　昭和40年（1965年）10月1日

9）金田一京助編　「学習国語辞典」　小学館

10）川村善之　「教育美術」　第47号・第4号　昭和61年（1986年）4月1日　p. 58

11）川村善之　「教育美術」　第47号・第4号　昭和61年（1986年）4月1日　p. 58

12）大学美術教科教育研究会報告　第1号　大学美術教科教育研究会　昭和54年（1979年）11月3日　p. 1

13）清水元長著　「幼児と造形（上）」　白眉学芸社　昭和44年（1969年）4月30日　p. 11～p. 17

14）　同　上　p. 14

15）　同　上　p. 14　p. 15　p. 16

16）　同　上　p. 18～p. 23

17）厚生省児童家庭局　「保育所保育指針」　日本保育協会発行　昭和55年（1980年）4月15日　p. 5～57

18）待井和江他共著　「改訂保母養成講座第11巻保育実習」全国社会福祉協議会　昭和55年（1980年）4月5日初版第2刷発行
19）波多野勤子著　「幼児の心理」　光文社　昭和44年（1969年）4月30日　p. 61～62
20）平井信義他共著　「保育所保育指針の展開と指導計画」　フレーベル館　昭和55年（1980年）1月20日第13版発行　p. 19
21）波多野勤子著　「幼児の心理」　光文社　昭和44年（1969年）4月30日　p. 134
22）平井信義編著　「幼児の教育用語事典」　教育出版　昭和51年（1976年）2月15日初版第2刷発行　p. 177（阿部明子）
23）梅原龍三郎監修　「近代造形」　光村図書出版㈱　昭和28年（1953年）1月　p. 1
24）西村貞雄　「造形について」　「造形おきなわ」第16号　沖縄県造形教育連盟　昭和62年（1987年）1月11日発行　p. 39
25）寺坂正信著　「図画工作（1）」　近畿大学豊岡女子短期大学通信教育部　昭和49年（1974年）1月3日　p. 6
26）滝口泰正著　「絵で一番だいじなことは」美術教育を進める会ノート№8　美術教育を進める会　昭和48年（1973年）8月1日発行　p. 18（三島二郎）
27）寺坂正信著　「図画工作Ⅱ」　近畿大学豊岡女子短期大学通信教育部　昭和50年（1975年）12月　p. 34
28）新見俊昌著　「幼児の美術教育」（財）大阪保育運動センター　昭和55年（1980年）5月20日発行　p. 19
29）多田真作著　芸術教育研究所編　「幼児児のための芸術教育」　鳩の森文庫　昭和51年（1976年）6月　二版発行　p. 8～9
30）新見俊昌著　「幼児の美術教育」　25）p. 19
31）平井信義編著　「幼児の教育用語事典」21）p. 99
32）多田真作著　芸術教育研究所編　「絵の教育」　黎明書房　昭和51年（1976年）4月20日　6刷発行　p. 13
33）滝口泰正著　「絵で一番だいじなことは」3）p. 21
34）藤田復生　「幼児の描画時間について」「別冊・幼児と保育」№8　小学館　昭和44年（1969年）11月25日　p. 76
35）清水元長著　「幼児と造形（上）」13）　p. 59
36）新見俊昌著　「幼児の美術教育」25）　p. 61
37）秋元幸茂　「わからない彫刻」「形 forme 131」日本文教出版株式会社　昭和58年（1983年）11月20日発行　p. 1巻頭言
38）よだとしひこ　「美術手帖　4」　美術出版社　昭和60年（1985年）4月1日　P 147